



アジア、オセアニアと日本を繋ぐ懸け橋に JALスカラシッププログラム

今年度のプログラム概要

7月2日	来日	
7月3日～8日	オープニングセッション →東日本鉄道文化財団のご協力をいただいて『鉄道博物館』を見学	東京
7月9日～14日	アジアフォーラム in 石川 →能登半島や金沢市でフィールドスタディ →国際交流まつりに参加し、白山市などで日本文化を体験（そば打ちなど） →ホームステイ（2泊）	石川県
7月15日	東京へ移動 →羽田で JAL 機体工場を見学	東京
7月16日～18日	クロージングセッション→鎌倉・江の島などでフィールドスタディ	
7月19日～21日	公開シンポジウム →ホームステイ（2泊） →21日の夕方より修了式 & フェアウェルパーティー開催	
7月22日	帰国の途へ	



『JAL スカラシッププログラム』は、アジアおよびオセアニア地域の大学生を日本に招待し、日本での生活体験や交流、研修を通じて日本への理解を深めてもらうこと、国境を超えて相互に理解し合うこと、そして未来を担う若者を育成することを目的に、公益財団法人JAL財団（以下、JAL財団）が、JALとの共同プログラムとして毎年実施しています。

このプログラムは、1975年に日本航空によって創設され、その後1990年に発足した財団法人日航財団（現JAL財団）に運営が引き継がれて回を重ね、これまでの参加者（スカラ）総数は1514名を数えます。そのなかからは、出身国の大臣、大手企業トップ、弁護士や著名歌手など、さまざまな分野の第一線で活躍する多彩な人材を輩出しています。また2013年には、マニラ、クアラルンプールを手始めとして、エリアごとにスカラールの同窓会組織が立ち上がり、世代を超えた交流もスタートしています。



航を記念したフィンランドの学生を加えた総勢22名のスカラールが、課題に取り組みました。

『アジアフォーラム in 石川』では地元の大學生も加わり、「石川・金沢の魅力を探る」をテーマに白熱した議論を展開。その後は東京に戻り、さまざまなフィールドスタディを重ねた成果を公開シンポジウムで発表するとともに、2泊3日のホームステイも体験。フェアウェルパーティーでは、涙とともに別れを惜しむスカラールの姿が多く見られました。

ふたり

のスカラールに、今回のプログラムに参加した感想を伺ってみました。

インド・デリー出身のアンキット・クマル・スリバスタバさんは、「多くのことを、この研修を通して学びました。とくに、『日本の魅力』に関する有益な講義とディスカッションのおかげで、日本をより深く理解できました。実際に、新幹線やロボット、サウナ、焼き物などを見たり体験することは楽しかったです。また、日本人だけでなくさまざまな国からの参加者に会い、関係を深めていくことを通じて、それぞれの国のことも学べました。この素晴らしい時間を、いつまでも大切にしていきたいです。一言でこのプログラムを称するならば、『奇跡の一期一会』でした」と語ってくれました。



また、タイ・バンコクの大学生であるスーンケットブンチャッチャモンさんも、おおいに刺激を受けたといっています。

「日本と日本文化について勉強する機会が多くあり、日本の魅力を深く探ることができました。また、私の日本語能力を向上させる機会にもなりました。さらに、参加した日本人

学生をはじめ、同世代の外国人の友達が多くできました。いろいろな場所で文化体験ができたことも本当に素晴らしいかったです。このプログラムに参加して、とても感動しました」



一方、

ホームステイのホストファミリーにとっても、スカラールを迎えるこの機会は、非常に有意義だとその声が寄せられています。

現在、高校3年生の栗林修平さんのご家族は、これまで何度もスカラールを自宅に迎えてきました。

「スカラールが家に来ると、どうしても両親が付きっきりになるため、小学生だった私は、ストレスを溜めてスカラールと喧嘩をしたことも……。しかし中学生以降は、彼らとも打ち解けて過ごせるようになり、その経験から次第に海外への関心が高まりました。そして、彼らのアドバイスもあって、ハワイ



への留学を叶えるという幸運にも恵まれ、本当に感謝しています。今は、多くのスカラールとの再会を楽しみにするとともに、両親に代わって自分なりの『おもてなし』をしたいと考えています」

同様に毎年スカラールを迎えている釘澤文子さんは、彼らの帰国後も交流を続けているといいます。

「わが家でホームステイの受け入れを始めてから、今年で10年目になり、これまでに8カ国の学生のホストファミリーとなりました。初めてのときは多少の戸惑いもありましたが、若いアジアの学生たちに刺激され、日本のことをもっと好きになってほしいと思いながら接しています。帰国後も、今ではSNSで近況を報告し合うことも可能になりました。この先もできる限り交流を続けたいと思っています」



さまざま

な人が、それぞれの立場から積極的にかわる『JALスカラシッププログラム』。今年のプログラムを通じてひと回り大きく成

生涯続くスカラールの絆 ■ JAL 財団／坂本憲昭 顧問

帰国の日は涙、涙。国が異なる若者たちがここまで親しくなれることに驚かされます。日本の学生さんからも「スカラールとの思い出で一生生きていけます」とのお便りをいただくこともあります。私にとっては、最後のスカラールを無事見送ったときが、一年で一番ホッとする瞬間なのですが、その先もスカラールたちの友情に終わりはありません。先日、卒業生13名が、現役スカラールとの交流会に合わせて東京で20年ぶりに同窓会を開きました。そこで見た涙を流して抱き合う彼らの姿には、心を打たれました。絆は生涯続きます。私は、このプログラムに携わることができて本当に幸せです。改めて、これまでこのプログラムを支えていただいた多くの皆さまに、感謝申し上げます。



長した22名のスカラールたちは、そうした多くの人たちの思いを受け止め、日本との絆をより一層深めながら、ますます活躍の場を広げてくれることでしょう。JAL財団とJALは、日本とアジア・オセアニアの国々を結び、相互理解と絆を深めるこのプログラムにこれからも取り組んでまいります。